

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	4390200014		
法人名	有限会社のぞみ		
事業所名	グループホーム八代のぞみ		
所在地	熊本県八代市千丁町古閑出421-16		
自己評価作成日	令和3年 9月 28日	評価結果市町村報告日	令和3年12月27日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do">http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	NPO法人 九州評価機構
所在地	熊本市中央区神水2丁目5番22号
訪問調査日	令和3年 11月 11日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

ゆったりとした田園風景の中にあり、周囲はいくさや野菜など彩り豊かな環境です。敷地には桜や椿などの草木が多く有り、季節を感じてのんびりと過ごせる空間です。今年開設15年目となり、スタッフは認知症ケアの理解も深く、利用者やご家族等としっかり信頼関係ができていて、安心して過ごしていただいています。これまでは、地域との各種交流も活発で、いきいきサロンや地域の催しにもよく参加し、地域の方々と支え合う協力体制を築いてきましたが、コロナ禍の影響で、各種交流、運営推進会議などが中止され、ホームでの活動に限定されているのが現状です。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

「いつまでも自分らしく生きるために」を理念とし、「家庭的な環境の中で安心と尊厳のある生活を営む」ことを運営理念に詠われている事業所を訪問時、職員の方々と共に笑顔で入居者の皆様が迎えてくださいました。職員面談でも、入居者が出来ることには過度な手助けをせず「待つ」ことが普段から行われているケアの様子を伺うことができ、訪問中も職員の声だけでなく入居者の声や笑い声も聞こえ、「家」を感じました。入浴時の着替えの準備も入居者自身が出来るような工夫がなされる等、生活の中で入居者の意向・意見・気持ちを大切に、「選択」の場面が作られています。入居者の「この職員さんは良いよ～」の声を直接聞くことができたことから日頃の様子が伺えるようでした。海拔0メートル地域であることから、防災面での対策にも力を入れた取組みがされています。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「いつまでも自分らしく生きるために」という理念を掲げて、利用者本位の支援をすることを毎朝の申し送り時に職員全員で唱和し、全員がその理念を共有し、常に意識し、実践に繋げている。	毎朝の申し送り時に唱和している理念は日々の生活場面で実践されている。入居者の「思い」や「できること」を大切にケアは画一的でなく、入居者それぞれに臨機応変に対応している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍のために、地域の催し物のほとんどが中止となり、地域とのつながりがなくなりつつある。わずかながら、管理者が地元まちづくり協議会の委員として、議論に参加させてもらっている。	昨年からの開催が難しかった運営推進会議を今年10月に開催し、地域との関係構築にも繋がった。例年、地域の生き生きサロンには入居者の参加もあり、再開が望まれるところである。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	コロナ禍のために、ホームで直に会って交流することはほとんどないが、電話等の問い合わせには、丁寧に説明するように努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍のため、令和2年4月から運営推進会議を開催していない。ホームの活動や研修などは文書にて家族や委員に報告しているが、相互の意見交換はほとんどできていない。	今年10月、約1年半ぶりに開催した会議では行政・地域からの参加もあり、事業所運営の様子を伝えるとともに交流を深めることができた。会議開催が難しい際には事業所の活動や様子を文書にて伝えている。	久しぶりの会議開催で地域との関わりも持たれた様子が確認できました。今後感染症再発等で開催が難しい際には、報告に加え、意見を頂く工夫(書面やアンケート等)も考えてみられてはいかがでしょうか。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者や日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	千丁支所の担当の方が運営推進会議のメンバーだが、コロナ禍で文書にての報告にとどまっている。支所窓口を訪ねた際、「利用者の安全を最優先にした運営をお願いします。」との声をかけていただいている。	運営推進会議開催時には市より参加がある。昨年から会議開催が難しい状況であったため書類での報告を行っている。日頃の報告・連絡・相談等により協力関係の構築に取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員会議時に内部研修として「身体拘束をしないケア」について職員全員で勉強している。玄関は日中は施錠せず、外に出たい方がいれば、一緒に寄り添う対応をしている	職員研修として身体拘束をしないケアについての資料読み合わせを行い職員の理解を深めている。現状心配する事例は見られない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部研修で、虐待防止の取組を徹底し、実践している。スタッフ不足で、ホーム職員本来の働き方が出来ず、ストレスが生じやすい状況ではあるが、職員の結束は固く、お互いを配慮し、不適切なケアにつながらないように注意している		

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護について研修する機会はあるが、制度の理解は進んでいる。社協の日常生活自立支援事業を利用されている方が1名ある。法人の別サービスで成年後見制度を利用の方がおり、具体的な事例で理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に際して、重要事項の説明を十分行い、利用者の疑問には納得がいくよう説明に努めている。介護保険の改訂に際しては、変更点の説明を十分行い、同意書を取り交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍のため、家族の面会や運営推進会議等の機会も少なくなって、家族からの意見や要望を受け取る機会が少なくなっている。家族様の意見や要望は職場全体で共有し、運営に反映させている。	普段は家族面会もよく見られるが、昨年からは場所や時間に工夫しながら個別に面会を受け入れてきた。運営推進会議開催時には複数家族の参加もあり、意見を得る機会としている。家族等には日頃の様子を電話等でも伝え、意見や要望を出しやすい環境作りを行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や毎日の申し送り時、法人の全体会議等で意見や要望を聞く機会がある。目標シートのやり取りを年2回実施しているが、その際にもいろんな意見を交換し、職員の意見や提案を運営に反映させている。	職員は、毎日の申し送りや会議時だけでなく、日常的に管理者や代表者に意見を述べる機会を持つ。年2回代表者による職員面談もっており、個別に意見や提案を聞く機会を設けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	目標シートを作成し、自身の目標や課題を認識し、日々の業務に向き合ってもらっている。目標の進捗や達成状況を評価することにより、各自がモチベーションを高く持って働けるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍のため、集合型の研修はないが、地域密着型サービス連絡会から提供される研修資料を活用し、資質向上に努めている。認知症実践者研修には、職員から選抜して受講するようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍のため、他事業所との交流はほとんどないが、地域密着型サービス連絡会のネットワークを活用して、今の課題を持ち寄って、解決に向けた協力関係を発展させていきたい。		

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	グループホーム入居に至るまでの経緯や本人の困りごと、家族への思いなどをできるだけ把握し、不安な気持ちを少しでも軽減できるように、本人の話や訴えをしっかりと傾聴する。そのことで、信頼関係を構築し、安心して生活できるように取り計らう。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	グループホーム入居に至るまでの経緯や家族の困りごとや苦労について何うにあたって、不安が大きいと考えられるので、ホームのこれまでの受け入れ事例や入居後の変化の事例などを話すことにより、家族の不安を軽減していくことに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居に至るまでのケアマネジャーや主治医と連携し、本人が必要としている支援を見極めるように努めている。医療的支援やリハビリの必要がある方は他サービス利用を含めて相談に乗るようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人と職員とはひとつの大きな家族と捉えて、本人のできることは続けていただき、一方的に支援するのではなく、同じ目線に立って、行動を共にするように心掛けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍のため、家族との面会がほとんどできていない状況が続いていて、不安に思われる家族も多い。面会時や電話等で家族の思いを汲み取り、家族に成り代わる心持ちで支援するように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍のため、馴染みの方の面会がなく、馴染みの場所への外出等がほとんどなくなっている。遠方の家族で、しばらく会っていなかったのに、テレビ電話を利用しての面会ができた例がある。	美容師の来訪や家族との外出・外食、面会等、例年の日常的な馴染みの人や場との関係継続が出来ない状況である。特に家族とは関係が途切れないよう、電話連絡や短時間の面会受け入れ等、工夫しながら支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	認知症のレベルの違いで、症状の強い方を嫌がられるケースもあるが、職員が上手く中に入って、大きなトラブルにならないように立ち回っている。		

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も本人様の様子を教えていただく家族もある。懐かしく思っていたきありがたく思う。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居に際しての聞き取りや日常のケアを通じて、本人の思いや希望を把握し、家族からの要望などを加えて、本人本位の対応ができるように努めている。	職員は日頃から入居者の「言葉」「楽しみ」を聞き、思いや意向を大切にケアを行っている。訪問時も職員から入居者へ声を掛ける姿がよく見られ、入居者の発語・意思表示を促す様子を伺うことができた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居までの生活歴や生活環境の情報を把握し、できるところはホームでも継続し、本人の希望に沿う形で進めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日勤の職員、夜勤の職員のそれぞれから、心身の状態の変化や残存機能の状態などの情報を申し送りや職員会議で共有し、その変化に応じた対応ができるように努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者ごとに担当者を決めて、担当者を中心に課題やケアのあり方について、毎月、職員会議で話し合い、状態に応じた介護ができるように介護計画を作成している。必要に応じて、家族等の意向を反映させている。	日頃の様子に加え、毎月全職員が参加する職員会議で入居者の様子を確認・共有し、担当職員の意見も取り入れて現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	利用者個別の経過記録に日々の様子を記録し、あわせて申し送りノート等も活用して職員間で情報を共有し、介護計画と実践状況を評価し、計画の見直し等に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	スタッフ不足の影響で、他サービス(デイサービス、有料老人ホーム)からの応援スタッフを迎えることがあり、グループホーム以外での取組みにケアのヒントをもらうこともある。		

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍のため、地元を含めて外部と交流する機会が極端に減っていて、法人内で催されるイベントなどを楽しむにとどまっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者全員が協力医にかかりつけ医として月2回の訪問診療を受けている。認知症専門医の受診をされる利用者もあり、こちらは家族の通院介助をお願いしているが、コロナ禍の現状では、本人の診察なしで、報告だけの場合も多い。	現状、入居者全員が協力医をかかりつけ医としており、月2回の訪問診療を受けている。受診の際は看護職員又は管理者も立ち合い、状況の把握及びその後の職員の共有も行っている。協力医以外の専門医受診は基本的に家族協力による通院介助をお願いしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は利用者に心身の状態の変化があれば、随時、看護職に報告・相談し、意見や指示をもらい、適切な看護につなげている。看護職から医療的な知識を受けようになり、自信をもってケアできるようになってきた。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、日常のバイタルデータの推移などの情報を提供したり、退院時には、病院での様子やホーム復帰に向けてのアドバイスをいただくようお願いしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に重度化や終末期に向けた事業所方針を説明し、入居後は状況の変化を捉えて、かかりつけ医と十分話し合っ方針を決めるように支援している。事前指示書を定期的に取り交わし、いざというときの心構えを持っていただくように努めている。	入居時に事業所の対応・方針を説明している。実際にその時を迎えた際には、家族・関係機関で話し合いを重ね、意向を都度確認しながら支援を行う。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の急変や事故発生時に備えた対応マニュアル等を整備し、看護職、管理者と連絡・相談し、早期に医療の支援に繋げるように努めている。看護職から都度、医療的な指導をもらい、対応力を高めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	熊本地震以来、地震(及び火災)を想定した訓練を年1回実施し、地震災害のことを忘れないように努めている。最近水害がより差し迫ったリスクと考えており、避難の判断やタイミング等を法人全体で課題として検討している。	各種災害に備え、地震・水害・火災等の訓練を定期的に行っている。訓練には入居者も参加し、地震訓練では頭巾をかぶってテーブル下に避難、火災訓練では消火器の体験等も行っている。海拔が低いため、垂直・水平避難の判断等、事業所で検討を重ねている。	

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの気持ちや性格を理解するよう努め、入浴時や排泄時などに尊厳を損ねたり、羞恥心を感じさせることがないように言動に注意している。	自立度の高い入居者も数名おられることから、排泄時の声掛け、オムツ交換、入浴時等には特に配慮している。日頃の入居者の関わりで出る入居者の「言葉」から入居者の思いを知り、入居者それぞれを尊重した対応を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の話を傾聴し、思いや希望を表しやすい雰囲気を作るように努め、なるべく自己決定ができるように配慮している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	食事や入浴については施設の都合で決まっているが、一日は本人のペースに合わせて対応するように配慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	清潔な衣類を身につけてもらうようお願いするとともに、本人の希望に沿った衣服選びができるように支援している。コロナ禍で、外出の機会が少なく、おしゃれする関心は低下している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	口から食べることの楽しみや重要性を理解し、調理の工夫、きざみの加工、季節感の演出などに配慮している。現状では、利用者と一緒に準備や片付けは困難と判断しており、野菜の皮剥きなどごく一部に限られている。	入居者の状況に応じて硬さや大きさ等個別に対応しており、ミキサー食においても素材の味を大切にしている。職員体制にもよるが、現在も地元野菜・食材をふんだんに使った手作りの食事を提供している。秋には干し柿作りを楽しむ等、季節を感じる取組みもやっている。	入居者の状況も年々変化しており、「出来る事」も限られてきた様子が伺えました。今後もできる範囲での関わりが継続されるよう願っています。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	試験的に調理済み食材を導入して、栄養バランスなどに注目している。これまでのやり方に上手く取り込んで、利用者の状態や能力に対応できるように試行している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、本人の力に応じた方法で、口腔ケアを実施している。8名がかかりつけの歯科医・歯科衛生士の訪問歯科診療を受けていて、口腔ケア、嚥下機能の維持に協力していただいている。		

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄記録に留意し、それぞれの方の排泄パターンを共有し、職員全体がその日の状態に応じた、スムーズな誘導・支援を心掛けている。	入居者それぞれの記録から状況を把握し、誘導・声掛け等を行っている。入居者の状況から過度な支援は行わず、トイレ使用时には職員は外で見守る等、それぞれに応じた対応を行っている。昼間は出来るだけトイレでの排泄に向けた支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄記録をとり、看護職やかかりつけ医のアドバイスを通して、食べ物の工夫(ヨーグルトなどの乳製品)や軽運動の促しなどで、整腸を意識している。適切なタイミングで適量の下剤を使用し、便秘の予防に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	従来から入浴のタイミングや回数は施設の都合で週3回となっていたが、スタッフ不足を理由に週2回の状態となっている。可能な利用者には、着替えを自分で準備していただくように働きかけている。	職員体制も整い、現状週3回の入浴を支援している。殆どの入居者が着替えを自分で準備できるよう工夫がなされており、入居者の好みや選択する力を大切にしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	室温や明るさなどの調整は利用者の好みを尊重して対応している。不眠の様子があれば、話を傾聴するなど安心して眠れるように工夫している。眠前薬で上手くコントロールできている方もいる。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方された薬について、薬剤情報提供書を確認し、理解し、状態に変化があれば、看護職やかかりつけ医に相談し、適切に対応するよう心掛けている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	料理や掃除の手伝い、洗濯物たたみやタンスへの片付けなど、これまでの習慣はできるだけ続けていただいている。コロナ禍で外出機会が減っているため、室内のウォーキングやエアロバイク、簡単なレクリエーションで気分転換を図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍のため、戸外に出掛けることはほとんどないが、同じ敷地のデイサービスや有料老人ホームに立ち寄りたり、施設周辺を散歩することがある。	例年、季節の花見や買い物、地域で開催されるサロン参加等行っていたが、昨年からは感染症対策により敷地内の散歩や事業所の併設施設への立ち寄り程度となっている。普段から家族との外出・外食を楽しむ入居者もおられるが、コロナ禍の収束によりまた再開されることが望まれるところである。	

グループホーム八代のぞみ

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理はホーム側が行っており、本人が希望されたり、必要と考えられるようなときは、管理者・事務長に相談して、買い物の支援をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙は家族からいただくことがほとんどで、電話を希望される方には、そばに付き添って支援することがある。コロナ禍を契機にテレビ電話を活用される方もあった。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用のリビングのエアコンの調整は中々難しく、寒がりの方への配慮を忘れないように努めている。眩しくてテレビがよく見えないという方がいれば、カーテンで調整する工夫をしている。季節ごとに手作りの装飾を飾って季節感作りを意識している。	近隣の田園風景により季節を感じることでリビングは明るく、温かい雰囲気を感じる。午後には廊下を歩く入居者の姿があり、外が見えるソファでは景色を楽しみ語らう姿もある。事業所敷地には季節毎に花が咲き、楽しみとなっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングにあるソファに思い思いに気の合った方の近くに座っていただいている。自室にて過ごされる方にも、自由に行動していただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	寝具や家具などは本人が馴染んだものなどを自由に持ってきていただいている。衣替えなどは職員と家族でよく相談して、季節に対応するように心掛けている。	整理整頓された居室は、好きなスポーツのカレンダーや家族からプレゼントされたぬいぐるみ等、入居者の好みや家族を感じることができる。居室からも外の景色や庭の木・花がよく見え、安らぐ環境となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや浴室、各居室などは、わかりやすいように絵柄の大きさを工夫している。照明を調整したり、整理整頓を徹底して、安全で、自立した生活に寄与する工夫をしている。		

2 目 標 達 成 計 画

事業所名 グループホーム八代のぞみ

作成日 令和3年 12月 27日

【目標達成計画】

優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目 標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1		地震、風水害、火事等の災害時の避難訓練につき、定期的を実施しているが、困難な想定やライフライン寸断等、まだまだ踏み込んだ訓練はできていない。加えて、地域の方々との連携の機会も少ない。	利用者、職員、家族、地域の方々と連携した災害避難計画を作成し、企画、訓練、評価、見直しのサイクルを回して、実効性の高いマニュアルを整備し、災害に強いホームを作る。	防災士などの助言やアドバイスを取り入れ、非常災害計画、業務継続計画（BCP）の整備をホームをあげて取り組む。各種防災訓練時には地域の方々に参加していただき、また、地域での訓練に際してホームとして参加することで、お互い頼れる関係を作る。	2年間
2		コロナ禍のため、運営推進会議が開催できず、地域の方々や利用者家族との情報や意見の交換の機会が少なかったり、表層の部分だけの交流に終わっていた。	今後のコロナの状況にもよるが、上手く運営推進会議の機会を活用して、利用者や家族にとって一層高い満足度のサービスを提供し、また、認知症ケアの点で、地域の方々と頼り頼られる関係を深めていく。	利用者家族の参加が少ないので、利用者家族が参加意向の高い行事と連動した会議を企画する。地域の関係者の中から多彩な参加者を招き、多面的に運営を支えていくように働きかける。	1年間
3		利用者の中には、介助が必要な方やきざみやミキサー加工の方も増えてきた。旬な食材を使って、その場で一緒に作って、食事を楽しむという理想から少し遠のいてきた感じがする。	新鮮な食材を活用することを継続し、それぞれの利用者に添った介助や食材加工を行いつつ、楽しい雰囲気作り而努力し、負担にならない介助の仕方を構築する。	旬や暦を意識した食材を活用し、食そのものや食材や季節にまつわる文化を話題にし、楽しい雰囲気の中、食事を楽しく過ごしていただく。また、歯科医や歯科衛生士と連携し、利用者に必要な食材加工に対応したり、それぞれの口腔内の状態に対応する。	1年間
4					
5					

注1) 項目番号欄には、自己評価項目の番号を記入すること。

注2) 項目数が足りない場合は、行を追加すること。